

「『即位の礼・大嘗祭』強行に抗議する声明」

私たち日本バプテスト連盟は、政教分離原則に立脚し信教の自由を守る伝統を有している。この立場から1982年「靖国神社問題に対する日本バプテスト連盟の信仰的立場（ヤスク＝宣言）」、1987年「日本バプテスト連盟結成40周年に当たって」、1988年「戦争責任に関する信仰宣言」を表明し、一貫して靖国神社国家護持・天皇神格化に反対して来た。さらに、1989年には「即位・大嘗祭に反対する理事会声明」を出し、自らの信仰的課題を確認した。また、カトリック・プロテスタントの教派を越えた「大嘗祭問題署名運動センター」の運動の一翼を担い、11月には「大嘗祭抗議100時間断食」を行った。

しかるに私たちをはじめ多くの人々の反対の声にもかかわらず政府は「即位の礼・大嘗祭」を強行したのである。私たちは自らの非力を省みるとともに、この暴挙に対して強く抗議するものである。現在、「即位の礼・大嘗祭違憲訴訟」が提訴され多数の原告により闘われているが、私たちはこの闘いに連帯の意志を表明する。

一方、1月10日仙台高裁は「岩手靖国違憲訴訟・玉串料訴訟」に対し、原告側実質勝利判決を行った。今回の半決理由の中では「天皇・内閣総理大臣の靖国神社公式参拝は、目的が宗教的意義を持ち、行為の態様からみて、国またはその機関として特定の宗教への関心と呼び起こす行為というべきである」ということが述べられた。これは、天皇・内閣総理大臣の靖国神社公式参拝が、私たちがかねてより指摘してきた通り、政教分離原則を侵すものであることを明らかにした。同時に、そこでは天皇の行為が国民に多大な影響を与えるものであることも指摘された。

今日、「経済大国」となった我が国は、自国の権益をどこまでも広げている。今や我が国の企業活動は、国境を越えて貧欲なまでに展開されている。そうした中で、政財界はこのようなかたちで経済活動に携わる人々を「日本国民」としてひとつにまとめあげる必要に迫られている。大嘗祭など一連の皇室神道儀式は、こうした意味で天皇を中心とする国民統合を推し進めようとするものほかならない。

神格化された天皇が日本文化の中心とされるなら、「日本国民」は他の民族に対して「選民意識」ともいえる優越感を強めることになるであろう。そしてこの感覚は、アジアをはじめとする第三世界の民衆への蔑視を煽り、情け容赦のない搾取を容易にするであろう。これはまさに聖書の神によって禁じられた「むさほり」（出エジプト20：17）にほかならない。

私たちはこの意味で2月23日に予定されている「立太子礼」の中止を求めるものである。また、昨年より海部内閣により再開された「閣僚の靖国神社参拝問題に関する懇談会」は、天皇・首相の公式参拝への道を開くものであり、同時に新たなる英霊づくりを目指すものである。私たちはこれ

に対しても反対の意志を表明する。

「あなたがたはこの世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ16:33)。天皇を神格化しようとする力はますます強められている。しかし、主イエスはその暗闇の只中で私たちに力を与え、勝利を宣言されるのである。ゆえに私たちは、泣いている者、奪われている者、「最も小さい者」(マタイ25:45)に伴われた主イエス・キリストに従うのである。

私たちは上記の信仰的立場から、即位の礼・大嘗祭強行に抗議すると共に、これらのことがらを教会の宣教課題として担い続けることをここに宣言する。

[世界バプテスト連盟加盟各国に送付]